



講演録

「世界の縮図」としてのシリア問題

講演 ヤシーン・ハージュ・サーレハ

モデレーター 岡崎弘樹 司会 山本薫 アラビア語通訳 森晋太郎

2023年2月25日（土）

明治大学駿河台キャンパス リバティタワー 1021 教室

主催：科研費若手研究「近現代アラブ思想・文学における「共存」構想とその実践」（研究代表者：岡崎弘樹）／科研費基盤研究（A）「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」（研究代表者：岡真理）／基盤研究 A「空間・暴力・共振性から見た中東の路上抗議運動とネーション再考：アジア、米との比較」（研究代表者：酒井啓子）／若手研究「現代イスラーム圏におけるユマニズムの再構築」（研究代表者：鶴戸聡）

Yassin al-Haj Saleh | ヤシーン・ハージュ・サーレハ |

シリア人作家。1961 年、ラッカ生まれ。

1980 年、アレppo大学医学部在学中に反体制派民主化組織に所属していたため当局に拘束され、1996 年まで収監される。

2000 年代に汎アラブ紙上でシリアやアラブの政治・社会・文化に関する論考を発表、2011 年以降はシリア革命に参加した代表的知識人として世界的に注目され、欧米紙などに論説が翻訳掲載されている。革命以後に国内潜伏生活を続けるも 2013 年、トルコに脱出。2017 年以降ドイツに滞在。



著書は『影のシリア——ブラックボックスを覗く』（2009）、『片足で歩く』（2012）、『引き継ぎし者の神話——現代イスラーム批判および批判の批判』（2012）など多数で、その多くが欧米語に訳されている。また邦訳『シリア獄中獄外』（みすず書房、2020）もある。

ワタン研究プロジェクトでは、人間と「ワタン/Homeland」の関係を人文学的視座からグローバルに考究しています。2023 年 2 月 25 日（土）、プロジェクトの一環として、ヤシーン・ハージュ・サーレハさんをお招きし、ドキュメンタリー映画『記憶への旅』（ハーラ・ムハンマド監督、2006 年）の上映および講演会を行いました。映画『記憶への旅』は、サーレハさんを含むシリアの作家 3 人がパルミラに向かう車内で「絶対的な監獄」と呼ばれた同地刑務所での収監経験を振り返りながら、来るべき「祖国」のあり方について話し合う模様を描いています。上演後は「世界の縮図」としてのシリア問題」と題し、サーレハさんにご講演いただきました。その内容を加筆・修正の上、ここに採録します。

ヤシーン・ハージュ・サーレハ氏講演

「世界の縮図」としてのシリア問題

モデレーター 岡崎弘樹 司会 山本薫 通訳 森晋太郎

岡崎：それでは、ヤシーン・ハージュ・サーレハさんの講演に移りたいと思います。講演に先立ちまして、簡単に経歴を申し上げます。1961 年、シリアのラッカに生まれ、1980 年にアレッポ大学医学部在学中、民主主義を求める組織に所属していたために拘束され、その後、映画で描かれましたとおり 1996 年まで収監されました。2000 年代以降、特に汎アラブ紙でさまざまな批評、政治・社会・文化に関する論考で周知の方となりました。特に有名になったのが 2011 年以降で、シリア革命に参加した代表的な知識人として世界的に注目され、「ル・モンド」誌や「ガーディアン」「ニューヨーク・タイムズ」その他にも多数翻訳が出ております。

2011 年 3 月、革命勃発後に国内で潜伏生活を続けるも、2013 年にはトルコに脱出せざるを得なくなりました。ところが、その年の 12 月にダマスカス郊外の東グータに残って活動していたパートナーのサミーラ・ハリールさんが拉致され、いまだに行方不明です。サーレハさんは 2017 年以降ドイツに滞在され、多数の著書が欧米語に訳され、日本語著書は私の訳した『シリア獄中獄外』しかないのですが、今回の招聘では京都、広島、そして本日の東京と講演を行っております。

今日のタイトルは「“世界の縮図”としてのシリア問題」ということで、これはサーレハさんがよく論考の中で使われる言葉です。シリアの問題は世界の問題でもあり、世界の問題はシリアの問題でもあるということを長らくおっしゃる中で、ここ 2、3 年、ミャンマーやウクライナも同じような問題になっているということで、今回こういうタイトルで講演をお願いしました。

それでは、まず今日来てくださった方々に対して、サーレハさんの方から一言お願いします。

サーレハ：皆さん、こんばんは。東京でいよいよお話しをすることができて嬉しいです。今回の講演が皆さんにとって有益なものになることを願っています。楽しい内容ではないかもしれませんが、少なくとも有益なものになればと思います。演題は「“世界の縮図”としてのシリア、“シリアの拡大図”としての世界」です。

シリアは比較的小さな国です。面積は 18 万 5000 km² 足らず。人口は 12 年前には約 2300 万人でした。シリアは、60 年前からバアス党が支配しています。かつての冷戦終結前の東欧諸国のような一党独裁体制ですが、その体制に追従して利益を得ている独立性のない政党は複数存在します。この 60 年のうちの 53 年間（1970 年以降）はハーフェズ・アサドの一族がシリアを支配して、この国を共和国から世襲の統治体制に変

貌させてしまいました。シリアはアラブ最古の共和国とっていい国ですが、ハーフェズ・アサドの30年、バッシール・アサドの23年で大きく後退してしまいました。

(2011年から始まった)シリア革命は、国を私物化したアサド一派からそれを取り戻す試みとして理解することができます。アサド政権は国を篡奪して個人所有の農場のようなものにしてしまいましたが、その盗み取った所有権を力で守ろうとしています。シリアの解放闘争は、平和的な蜂起でしたが、最初から体制側の武力攻撃を受けたため、武力紛争に変わってしまいました。また、国内のシリア人同士の紛争であったものが、国内外の複数の勢力が入り込み、絡み合う紛争に変貌しました。

アサド政権は元々、周辺地域に暴力を送り出すポンプのような存在でした。レバノンを何十年も支配し、レバノン国内の各勢力の間の関係を弄びました。イランの味方としてレバノンのヒズボラーを支援しました。トルコ、パレスチナ、イラクの武装組織と関係を築きました。

シリア革命が始まると、逆にレバノン、トルコ、イラクというこれらの隣国から暴力が入り込んできました。多くの場合は、かつてアサド体制が支援したのと同じ勢力が体制側に立って暴力を振るいました。それは、レバノンのヒズボラーやクルディスタン労働者党(PKK)や、イラク人民結集隊(The Popular Mobilization Forces, PMF)などイランの支援を受けたシーア派組織などです。

スンナ派の組織でも、2003年のアメリカによるイラク占領の後、シリアを拠点にしたイラクでの活動にアサド体制が便宜を図ったジハード主義勢力があります。ヨーロッパからシリアを経てイラクに入って活動するのにアサド体制が便宜を図ったのです。

アサド政権は表向きの国家システム、すなわち政府や議会から構成される国家の影に隠れた見えざる実質的な国家システムが存在するという二重の構造を持っていて、この実の国家は秘密警察やアサド一族によって構成されるものです。シリアは国家よりも下位の非国家主体が自らの利益のために国家を支配するという状態にあるのです。

2012年の夏以降はジハード主義者の勢力がアラブ諸国やヨーロッパからトルコの国境を越えて怒涛の勢いで入ってくるようになりました。アルカーイダやダーイシュ(IS)は、シリア人も参加していましたが、基本的にはさまざまな国の出身で、各地で活動するジハード主義者によって形成された勢力です。

スンナ派のジハード主義者は、シーア派のジハード主義者がイランに追従するのと違って、何処かの中央に従属するということはありません。その成立の起源からグローバル化されていて、基本的にアフガニスタン紛争という実験場で形成されたもので、政治的なイマジネーションや目標もグローバルです。

そのようなスンナ派のジハード主義が台頭したことは、世界的な問題を反映しています。イスラム圏におけるイスラム教徒の状況や、世界におけるイスラム教徒コミュニティの状況、特に欧米諸国、さらにロシアや中国、インドにおけるイスラム教徒移民社会の状況と関わっています。

しかし今述べたような非国家主体よりも重要なのは、シリアに介入している諸外国の問題です。イランは当初からさまざまな形でアサド体制への支援に関与してきまし

た。そして2012年7月には、アサド体制による武力攻撃や、革命に対抗する戦略を主導する役割を担うようになりました。2013年春には、イランに追従するヒズボラーが正式にアサド体制の側に立って、シリアに介入しました。

2014年9月には、アメリカ合衆国がスンナ派のサラフィー・ジハード主義勢力に対する「テロとの戦い」の旗印の下に介入しました。アメリカは2013年8月に化学兵器による虐殺が起こった後、アサド体制に害が及ばないように尽力し、体制側の化学兵器を形式的に廃棄させる合意をロシアと結びました。アメリカは実質的には、その他の手段による殺人を何の懲罰もなしに継続することに対するお墨付きを与えていました。化学兵器が結局実際は使用されたということは、1ヵ月前に化学兵器禁止機関（OPCW）が発表した2018年4月の（ダマスカス郊外県の）ドゥーマにおける化学兵器使用に関する最新の報告書にも述べられているとおりです。

ロシアは、2015年9月にアサド体制側に立って介入しました。アメリカの介入の1年後で、これも「テロとの戦い」の旗印の下にでしたが、ロシアの言うテロリストとは、ISやアルカーイダだけではなく、体制に抵抗する全ての人々です。

ロシアは初めて隣国以外に基地と空軍を含む兵力を保有することになりました。これまでロシアは中央アジアや東欧などの近隣地域に拠点を持ち勢力を拡大するのが常でしたが、シリアのような遠隔地域に初めて拠点を持つことになりました。それに対して周辺地域や国際社会からの反対はありませんでした。国連も正統な政府からの要請だということで反対しませんでした。

これによって帝国主義的な野望を持つプーチン体制は増長し、ウクライナ侵略に向けて一步を踏み出すことになりました。ウクライナ侵攻後によりやうく、ロシアのマリウポリなどでの犯罪行為は、アレッポで行ったのと類似していると指摘されましたが、アレッポが爆撃され、破壊され、多数の人々が追放される最中には、そのような言及はなされなかったのです。

イラン、アメリカ、そしてロシアの1年後の2016年にトルコが介入します。これも「テロとの戦い」の旗印の下にですが、トルコの言うテロリストとは、親クルディスタン労働者党のクルド人武装勢力（PYD）です。イスラエルは2013年1月以降、シリア領内の特にイランの軍事拠点を攻撃してきました。イスラエルは断続的に、2022年の1年間で28回、この10年間では数百回の攻撃を行っています。イスラエルは1967年6月以降、シリアのゴラン高原を占領し続けています。

要するに、シリアには3つの地域大国であるイラン、トルコ、イスラエルと、世界の2つの軍事大国であるアメリカ合衆国とロシアが介入しています。この状況を私は一つの国の内側に入り込む帝国主義、あるいは「液状化した帝国主義」と呼んでいます。複数の帝国主義勢力が一つの小さな国の中に流れ込んでいるからです。かつては中心となる一つ、あるいは少数の帝国主義勢力が広い地域を占領し支配するというのが一般的でしたが、シリアは小さな国なのに5つの帝国によって支配されているのです。

シリアは現在、5つの地域に分かれています。第1に1967年以降イスラエルの占領

下にあるゴラン高原、第2に1970年以降アサド政権に占領されているシリアの主要な部分、第3にトルコのPKKの影響下にあるPYDを通じてアメリカに支配されている地域、第4にアルカーイダから派生したシャーム解放機構（HTS）に支配されているイドリブ周辺の地域。第5にトルコに支配されている国境付近の地域。今回の地震（2023年2月6日に発生したシリア・トルコ地震）では、アサド政権の支配地域なども被害を受けましたが、震源はトルコだったので、この国境地帯が最も大きな被害を受けました。

ここで1970年以降、シリアの主要部分がアサド政権に占領されていると言ったのは、アサドの国家は植民地体制の延長線上にあるものだからです。分割統治という手法においても、非常事態がずっと続いているという意味でも、法の支配ではなく大統領令や政権からの指示によって統治がなされるという点でもそうです。これはハンナ・アーレントが植民地支配の特徴として指摘しているところです。懲罰的な施策によって支配するのも植民地的な手法です。また政治的な交渉の対象になるのは国外の有力な勢力だけで、国内においては国家が一元的に生殺与奪の権利を握る支配者としての顔を見せるという面でも、植民地体制の延長線上にあるということが言えます。

シリア問題がこのようにグローバル化される中で、シリア人は世界中に離散しました。人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチの約1年前の報告書によると、離散の行く先は合計で126カ国に上ります。特にトルコ、レバノン、ヨルダン、ドイツ、エジプトとイラク領クルディスタンの6カ国に多く居住しています。ヨーロッパ以外では、難民としての法的な地位を享受していません。ヨーロッパにおいても一部の人々は難民キャンプで数ヵ月、あるいは数年間にわたって劣悪な環境の中で過ごしています。また、何千人もの人々がギリシャの島々で行き場を失っています。トルコに戻ることは望まないし、ヨーロッパに入ることは許されないという状態です。

要するに、世界がシリアの中にあり、シリア人が世界中にいるのです。そこで私は、世界の縮図（ミクロコズム）としてのシリアと、シリアの拡大図（マクロコズム）としての世界という言い方をしています。シリアに続くロシアのウクライナへの侵略も、またこの方向に進んでいます。シリアは元来重要な国ではありません。ただシリア人にとっては他に国がないから、重要な国です。しかし、世界の縮図になった以上、シリアは誰にとっても重要な国になるべきです。何故なら、今日の世界についての捉え方を示してくれるでしょうし、世界の未来の姿を体現しているかも知れないからです。

イマニュエル・ウォーラーステインは、「私たちが世界に対して行うことは、自分自身に対して行うことだ」と言っています。シリアは世界の中にあるのだから、シリア人に起きたことは世界に起きていることです。そして世界をより生きにくい場所に変えてしまっています。シリアは12年間正義が存在せず、懲罰を逃れて犯罪を栄えさせるための楽園のような国になっています。犯罪者が誰も罰せられないので、抑制が効かなくなっています。この不正義の楽園で、私の愛する者たちが失踪させられました。私の妻と兄弟と友人たちです。それはつまりシリアというミクロコズム（縮図）の運命だけではなく、私たちの個人的な運命もまたグローバルに定められているというこ

とです。

それは私自身の愛する者たちが失踪させられたことと現在の国際秩序とが結び付いているということであり、愛する者たちを守ることは世界における変革、世界を変えるための営みである、ということでもあります。この闘いが、より正義と人間性のある世界を共に夢見る私たちにとって、どう見ても私たちの力を超えるような闘いだということは分かっています。しかし、この夢を育むことは今日、死に物狂いで自らを守ろうとする行為なのです。ありがとうございました。

質疑応答

岡崎：ありがとうございました。今回、京都では、先ほど見ていただいた映画のとおり、監獄について語っていただきましたが、その際在日コリアン研究者のカン・ジョンホン（康宗憲）さんをお呼びして対談していただきました。カン・ジョンホンさんは1975～1988年に韓国の西大門刑務所に収監されていました。サーレハさんとの対話の中で、日本とのつながり、それから東アジアとのつながりを共に考えました。その後広島では「語られるジェノサイド、そして語られないジェノサイド」というタイトルで、広島の経験にも多少言及しながら、世界でいかに対テロ戦争の名の下で「語られない大量虐殺」が続いているという問題を取り上げました。そして今日こういうお話を頂き、いかにシリアという小さな、シリア人以外にとっては重要ではないとおっしゃるその国が、実は世界の問題になり、そしてこの日本における一人一人の問題にまでつながっているということを知りました。

それでは、ここからはせっかく今日は来ていらっしゃる方もいますので、いい機会ですので質問していただき、対話の機会にしたいと思います。

質問者 1：今日ここにいる参加者はシリアの問題に関心を少なからず持っていると思うのですが、サーレハさんは（世界の）無関心な人たちに対してどう思っているのか、どうすればよいと考えているのか伺いたいと思います。

サーレハ：無関心な人々は視野が狭く、先のことが見えていないと思います。例えば第1次世界大戦が起きたときも、ヨーロッパの状況についてあまり深く考えず、はっと気が付くと何百万人もの人々が亡くなる大きな戦争になりました。その後もドイツがチェコやポーランドに侵攻したにもかかわらず、西欧の人々はあまり関心を持たなかったのですが、結局第2次世界大戦で何千万人もの人々が亡くなりました。

今、シリアはシリア人以外にとって重要ではない国ですが、イラン、トルコ、アメリカ、イスラエル、ロシアといった国々が介入し、非国家主体が跋扈する中で、シリア人口の30%に相当する600万人が難民になりました。日本にもシリア難民は数百人（以上）おられると思います。そして50万人以上が亡くなるという事態に至っていま

す。そのうえでシリアは重要ではないと言うのは、視野が欠けていると思います。

プーチンが今ウクライナに攻め込んでいる状況で、核兵器の使用についても言及しています。この状況にシリアは果たして関係ないのかと問いたいです。より危険の少ない人類の未来のために、誰に対してもあれこれ指図するつもりはありませんが、先を見ることが必要なのではないかと思います。

岡崎：ありがとうございました。では、そちらの方、お願いします。

質問者 2：私はもう定年で辞めるのですけれども、大学で東ヨーロッパ、ロシアと東ヨーロッパのことを研究している者です。今日の話は、映画と併せて考えると非常に重要というか、一体出口はどこなのかということのを思いました。改めて考えて、われわれ自身の問題につながっています。現在のシリアは出口が見えない。厳しい終わりのない戦争が続いていて、シリアへの関心もまた厳しい状態だと思うのです。そういう意味で、もう一度自分たち自身のことを考えると、実はシリアの内戦の直前に東北大震災があって、福島原発の事故があって、数から言えばもちろんシリアの難民の方が多いわけですが、十何万人が原発難民となって、その人たちの生活がいまだに震災後の原発難民の状態にあるということです。もちろん多くの方が帰れない状況を考えているのですけれども。そういう意味では、シリアは内戦状態にあります。終わりのなさ、出口のなさをどのようにとらえたらよろしいのでしょうか。

サーレハ：質問をどれくらい理解できているか分かりませんが、先ず私は「内戦」という言葉に異議があります。講演でも言及しましたが、アメリカ、ロシア、イスラエル、イラン、トルコと、これだけの国々が介入しているのを内戦と言えるのでしょうか。国家自体が国家の資源を動員して、化学兵器や樽爆弾も使用して、拷問と殺戮を産み出している状況の中で、これを内戦と言えるのでしょうか。非国家主体が何ヵ国も侵入しているこの状態を内戦と言えるのか。内戦という言葉は非常に誤解を招くと私は思っています。

2011 年の秋から 2012 年末までは、シリア人同士の対立で内戦と言っていいかも知れません。シリアの状況は、最初は平和的なデモで始まりました。それに対するアサド体制の弾圧があって、そこから武力闘争に発展しました。その段階にでは内戦と言えるかも知れませんが、2013 年春にヒズボラーが介入した後の状況は内戦と言えるようなものではないと思っています。

シリアの紛争が続いているのは何故かと言うと、それは紛争が継続することで利益を得る多数の当事者が関わっているからではないかと思います。ロシアの帝国主義的な野望、アメリカの終わることのない対テロ戦争、イスラエルは地域における自国の安全保障と支配を強化する目論見があり、イランも帝国主義的な野望があり、トルコは国境の両側でのクルド人との紛争があります。アサドが何を欲しているかという、まさに（アサド体制が国民に強いる）「永遠に」というスローガンのとおり、永遠に自

分たちが政権を維持するために、紛争が続いた方が望ましいのだと思います。答えになったかどうか分かりませんが、いかがでしょうか。

岡崎：ありがとうございます。内戦という言葉自体を私たちが無意識のうちに使ってしまったというそのこと自体が、出口のなさ、閉塞状況を生んでいるということですね。私たちも内戦と言うことで、その閉塞を自ら作り出している、そういう思考になっている、そういう言葉になっているというふうに考えれば、今のお答えにもつながるのではないかと思います。

時間がありますのでもっと質問していただきたいのですが、今日、実は3週間前の2023年2月8日に発生したシリア・トルコの地震に関しまして、日本の支援団体の方、もしくはいろいろ関わっている方に、1~2分ぐらい紹介していただく予定ですが、日本に在留していらっしゃるシリア人ジャーナリストのナジーブ・エルカシュさんが、今日は別の用事で行かなければならないということで、活動を紹介させていただきます。

エルカシュ：シリア人ジャーナリストのナジーブ・エルカシュと申します。東北の震災以降、ずっと10年くらい東北で被災地取材させていただいています。ニュースだけではなく、いろいろなプロジェクトに関わっていて、東北の仲間がたくさんいます。今回のシリアの地震、東北の方々の力を頂きながらシリア支援活動を行っております。

この情報は、携帯で写真を撮っていただければと思いますが、ここに福島県東北最大級のNPO法人で、「チームふくしま」というのがあります。「チームふくしま」で有名なのは、「ひまわりプロジェクト」です。福島と全国、あるいは世界を、ヒマワリの種を使ってつなげるプロジェクトというもので、55万人ぐらいの参加者がいらっしゃるのです。それで今、募金を集めています。

今回のキャンペーンは募金のキャンペーンで、まずは大至急に支援物資を送ります。大事なことは、次のキャンペーンもやりますけれども、次のキャンペーンは文化的な側面をとっても大切にしています。ぜひその両方の被災地を、文化を意識しながらつなげたいと思っています。この写真で見えるのは、私は日本の被災地の10周年のときに、福島の絵本『僕のひまわりおじいさん』をアラビア語にして、シリアの難民キャンプの子どもたちに届けました。とにかく実際にこれ（もとの日本語版）を読んでいただければありがたいです。シリア・アメリカ医療協会とムルハム・チームという二つの団体があります。もし振り込みが面倒でクレジットカードを使いたい方は、ぜひシリア・アメリカ医療協会でご検索していただければと思います。それで、クレジットカードでオンラインで決済できますけれども、私はできたら東北からどれぐらい集まったか、それを福島からメッセージと共に現地に送りたいという発想なので、できたらぜひ振り込んでご協力いただければと思います。ありがとうございました。

岡崎：ありがとうございます。では引き続き質疑応答を続けていきたいと思っています。

質問者 3：今日はいろいろな貴重な話を聞かせていただき、ありがとうございます。私はミャンマー出身の留学生です。一つ伺いたいのですが、今、シリアの難民問題で、国外に逃れてしまったシリア人がたくさんいますが、シリア国内にも難民キャンプがあります。今、国内に紛争があるのでいろいろ大変だという話をお聞きしたのですが、国際機関などがシリアに入って、難民キャンプなどに支援物資を届けるのに、どういう手段を取られているのか知りたいのです。なぜかという、紛争が激しくなり、一般の市民も狙われたりするので、国際機関としてもそういうことを考えた上で支援を届けていると思うので、それに関してどういうお考えなのかお聞きしたいです。

サーレハ：私は理想的には国際連合を通じて支援が行われるべきだと思います。災害が大規模なので、非常に多くの支援が必要です。国際社会の各方面の連携も必要で、専門的なチームが必要です。ホワイトヘルメッツやムルハム・チームのような小規模のグループだけでやることには限界があるので、国連の関与が理想的で重要です。しかしこの 12 年間、国連はアサド体制と癒着してきたという面があり、例えばダマスカスに届いた支援物資が市場で売られているとの報告もあります。国連は腐敗しており、アサド体制は非常に腐敗しています。だからより安全な手段としてシリア人のグループを通じて届けるのが確実だという面は確かにあると思います。日本の山田一竹さんのグループである SSJ (Stand with Syria Japan) もこうした支援を現地で行っていて、私は個人的にこのグループを通じて支援をしたこともあります。

ともかく規模の大きさから言えば国際連合が関与すべきです。国内シリア人の 90% が貧困ライン以下の生活を送っていますが、それは地震前からの話です。地震ではシリア北部で 6,000 人が亡くなりましたが、それ以前にシリアではそもそも 50 万～60 万人が殺害されています。その 9 割が体制側によるものです。そういう状況の中で地震が起きました。先程の質問者のお話に繋がるかも知れませんが、国際社会やアラブ諸国が適切な対応をせず、その介入によって却って問題が長引き深刻化することに繋がったと思っています。

岡崎：ありがとうございます。後で、SSJ の話をしてもらおうかなと思うのですが、その前に質問を先にお願ひします。

質問者 4：ありがとうございます。最初に映画の感想ですが、シリアの現状というのは、見えないものがたくさんあるし、語られないこともあるし、誰がどのように見るとかで見えてくる世界が違うと思うのです。今回、サーレハさんが当事者（出演者）として見えてきたことを表現することで、「ああ、こういう現実もあったのだ」とたくさんの気づきがありました。まず、これが感想です。

こういった見えないことがたくさんある。見えないことも聞こえないものもたくさんある中で、映画に関わられた当事者として、どのようにシリアを伝えていくのかみたい、テンションみたいな、葛藤みたいなものがあるのかなと思うのです。例えば

きっとサーレハさんはシリアのことを大好きな一方で、そういう経験もされて、見えない部分を語っていく。でも、こちらの方面を語ると「シリアはそんな社会だったのだ」というようなメッセージも伝わってしまう。そういったご自身が見せたい現実をどのように映画に関わった立場として何か表現していच्छるのか、お聞きしたいなと思いました。

岡崎：私の方から説明なのですけれども、今回の映画は、サーレハさんが登場されていますが、監督自体はハーラ・ムハンマドという方なのです。けれども、ご質問に関連してお答えを頂けますでしょうか。

サーレハ：シリアについてはできればポジティブなことを話したいのです。私は生まれて殆どの時期をシリアで過ごし、両親はシリアに埋葬されているし、シリアで教育を受けました。ポジティブなことを話したいのですが、シリアは講演の冒頭に言ったとおり、「アサドのシリア」一派に篡奪されています。シリア人は自国にしながら余所者のようになっています。私は投獄されて市民権を剥奪されましたが、そもそも権利など存在しません。シリアは法治国家と言えるような国ではありません。シリアが憎いからではなく、愛しているからこそ、そう言わざるを得ません。正義と人間の尊厳と自由のある国に変えていくことを望んでいるから、圧制に立ち向かわなければならない。人々が投獄されない国にしたい。私は監獄も拷問も知っていますから、そういうことが起きない国にしたい。この国を地獄に変えた者たちに対して倫理的、政治的な問題を提起していくことにコミットするのです。私は著述家であって政治家ではなく、政治活動をするわけではありませんけれども、シリアを政治的に表象するための知的な、思想的な地ならしをしたい。そして遠くない将来に、民主的なシリアが実現できればと考えて活動しています。

岡崎：ありがとうございます。他に質問をお願いします。

質問者 5：今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。映画の中で 3 人の方の会話を聞いているときに、言葉の繊細さとか豊かさとかそういったものをすごく感じました。私自身もシリアでアラビア語を学んだのですが、私にアラビア語を教えてくれた先生も、実は投獄された経験がある人です。なので、そこから来る言葉というのを今回感じたのですけれども、サーレハさん自身がすごく大変な経験ですとか、12 年間のシリアの絶望的な状況ですとか、そういった中で自分の心の支えにしているような表現や言葉、信条みたいなものがあったら、ぜひ教えていただきたいなと思いました。

サーレハ：私は格言やことわざにはあまり縁がありません。私は元々共産主義者で、

共産主義者の中には反体制派も体制派もいます。ソ連に対して非常に友好的な共産主義者もいましたが、我々はソ連に対しては批判的な立場でした。私たちの闘いは共産主義よりも民主主義の問題だったのです。

私たちは若かったのでロマン主義的な傾向がありましたが、邦訳された著書『シリア獄中獄外』の中で私が伝えたかったのは、「監獄」という神話を壊すことでした。監獄が英雄的な行動の場であるとか、不屈の魂をもって飛び込む場であるとか、そういうイメージを壊したかった。私は非常に苦かったし、たびたび絶望に駆られました。絶望の病にかかっては治るという繰り返しでした。今は絶望はしませんが、希望に満ちているというわけでもありません。私が入っていた刑務所は最悪の虐待ばかりが行われていたわけではなく、本を読むことが許されていた時期も長くあったので、私は非常に多くのことを学びました。監獄という学校や大学を卒業したようなものです。私は医学部を卒業しましたが、それよりも監獄という大学を卒業したという意識があります。監獄の中で本を沢山読みました。今も本を読むのは大好きですが、読書したからこそ著述家になったと言えます。これが御質問に対して私の思いつく答えかなと思います。

一つ付け加えたいのですが、今回この映画を見た時、自分のアラビア語の話し方に驚きました。今はあのような話し方をしないのです。これをどう解釈するかというと、一つには技術的に音声が悪かったから吹き替えが必要だった部分もありますが、それを除いても例えば子音を続けて長く発音するとか、語尾を飛ばしてしまうとか、そういう（詰まったような）話し方の特徴を感じました。

また他方では、自分が獄中でさまざまな動揺を経験して、それが話し方に影響を与えていた面もあるのかなと思います。私は著述家なので書く方が楽で、話しているときには動揺が表れていたのかも知れません。

岡崎：次の方、お願いします。

質問者 6：フリーランスで記者をやっています。どうもありがとうございます。まず、サーレハさんが体制によって拘束されて収監されたのがハーフェズ・アサド政権下でしたが、その後のバッシュール・アサド体制による抑圧というのはどの程度だったのかをお聞きしたいです。

また、2011 年以前にシリアに行ったことがある日本人は結構いまして、旅行者や海外協力隊などいろいろな人が行っているのですけれども、彼らの中にはシリアというのは非常に平和な国で、なぜ戦争が長期化するのが不自然であるという意見があります。外国の勢力が煽ったのではないかというわけです。それはアサド政権が喧伝してきたのですけれども、そういう意見の持ち主が日本人の中にもかなりいるのです。ですから 2011 年にデモに参加した人々がどういう不満をもって行動に出たのか、なぜ彼らはデモをしなければいけなかったのかということを知りたいです。それに対して収監経験をお持ちのサーレハさんが、デモに参加した人々の姿をどんな気持ちで見

ておられたのかというところをお聞きしたいです。

映画についてですが、監獄の中の話、全て私は共感できます。私はアサド体制によるものではないのですが、(シリア北部の)武装組織に3年ほど捕まった経験があります。その拘束されている中の心情であるとか、拘束する者の理不尽さとか、この理不尽であるところに意味があるとか、理不尽であるからこちらは意味が分からないという経験をしました。この監獄のシステムであるとか、そこにおける心情であるとか、ご著書にも書いておられるのですが、最悪の状況の先にさらなる最悪があるということなのかもしれませんが、そういうところの心情が非常に共感できるところです。恐らくシリアでもそこに共感できる人というのはものすごくたくさんいて、それが問題なんです、悲しいことなのかもしれませんが、日本では逆にそれが通じない人がかなり多いと思います。それは日本がそういう体制ではないから通じないのですが、逆にそれが理解できず、無関心になっていく。シリアほど抑圧されていないところでは、むしろ人が不寛容になっていくという現象があると私は思っています。これは感想です。

それで、バッシヤール・アサドの時点での抑圧がどういうものだったか。それから人々がデモを始めた動機というか、なぜデモをしなければいけなかったのか、それを現地でどう見ていたのかということをお聞きしたいです。

サーレハ：ありがとうございます。似たような経験をした仲間同士ですね。そしてシリア人として申し訳なく思います。(シリア北部の)武装組織に3年も拉致されたということで、予想だにしていなかったことでしょうし、何が起るか先行きも見えないという経験は非常によく共感できます。私は16年間獄中にいましたが、戒厳令下で、11年4ヵ月経つまで裁判を受けられず、15年の刑期が終わった後にパルミラの刑務所に送られて拷問を受けるという経験をしました。したがって質問者のご経験にも非常に共感を覚えます。

ハーフェズ・アサドの時代とバッシヤール・アサドの時代の違いについて言うと、ハーフェズ・アサドの時代は、犠牲になったのは主に反体制派の活動家でした。共産主義者であれイスラム主義者であれ、自分の意見を表明した市民であれ、ある程度は組織に属して活動する人々でした。それに対してバッシヤール・アサドによる弾圧は、そもそもそうした政治組織が潰された後に行われた民衆蜂起に対する弾圧です。拷問などが行われましたが、それは民衆蜂起を打ち砕くためで、逮捕や投獄に限らず、擲爆弾を投下したり、包囲殲滅作戦の実施、化学兵器による攻撃など虐殺、ジェノサイドが行われました。圧倒的に人命が軽視されているのが、バッシヤール体制下の抑圧です。人命が非常に安いものとして扱われ、特にイスラム教スンナ派の人々はそのような弾圧を受けています。ハーフェズ時代も爆撃は行われたし、ハマーの虐殺では何万もの人々が虐殺されましたが、バッシヤール時代と違うのは(政治)活動家に対する弾圧が主だったということです。

日本人がシリアを平和な良い国だと思い込んでいるという話ですが、シリアは観光

客には良い国でしょう。食べ物もおいしいし、人々は友好的でホスピタリティに溢れている。外交官であれ、学者であれ、中産階級に属する人なら、シリアでは王様のような生活をする事ができる。物価は安いし、彼らが付き合うのはエリート層で、おいしいレストランや素敵なカフェを知っていて、清潔なホテルに泊まって、シリアの上層2%の人たちや外国人たちとのおつきあいがあります。それでは何ヵ月いようが、シリアの本当の姿は分かりません。100m 先では獄中で警察による拷問が行われているかもしれない。新聞を読んでも、バアス紙やサウラ紙といった新聞にはそんなことは一切書いていない。日本人であれフランス人やアメリカ人であれ、もっと血の通った人間の見方をしなければならない。きつい言い方になりますが、彼らが接しているのは圧制に手を貸す連中なのです。そのような人たちは中央アフリカの独裁国家に行っても、いい人たちだ、美しい自然だ、と言えてしまうのだと思います。これはシリア人にとって屈辱的な状況で、あってはならないことです。

何故デモが起きたかという、蜂起が起きる前の段階で、2007 年には貧困ライン以下で暮らしている人が 30~40%いて、さらに 11%の人々は 1 ドル以下で暮らしている状態でした。シリア人は 100%、皆が皆、「政治的な貧困ライン」以下の生活をしていました。表現の自由も結社の自由もなく、人権も認められていない状態で生きていたのです。2005 年以降の開放経済の中では新型の自動車が輸入されたり、アラブ諸国の銀行の支店が開かれたりもしましたが、それは主にダマスカスやアレppoのような都市の中心部だけで、郊外や地方部では却って生活のレベルが下がりました。そういった地域で蜂起が起きたのです。最初は平和的なデモでした。アラブの春のチュニジアやエジプトやリビアやイエメンやバーレーンの出来事に力を得た面もあったことでしょう。

私がどう見ていたかという、私自身の経験から危惧し予想していたのは、体制は生き残るために破壊の限りを尽くすだろうということです。一方で、2011 年の蜂起が起きる直前にレバノンのサフィール紙に論説を書いたのですが、多数の市民が広場に集まって体制の打倒に到る可能性も考えました。実際にシリア人はそれを試みました。例えばダマスカス中心部のアッバス・スィーン広場では 4 月の初めに、国内各地から人々が集まりました。人数は正確には知りませんが、多数の参加者が体制側に殺されました。他の場所でも数千人の人々が集まったものの殺害されて、ブルドーザーで処理されるようなことも起きています。体制の野蛮性に危惧を覚えつつ、広範な人民の参加に希望を抱いていました。体制側はさらに大規模な殺戮を行い、空軍や化学兵器まで使用するという方向に向かいました。

その後、シリアの人々が期待したのは、世界がさすがに放っておかないだろうということでした。だから蜂起に参加した人々はあのとき起きていたことを記録して SNS で世界中に知らせました。世界の人々はそれを見ましたが、何もしてませんでした。日本人の中には、シリアの民衆蜂起はアメリカによる体制転換の企てだったのではないかと言う人もいますが、アメリカは先程も言ったように、化学兵器による攻撃があった時も体制が生き残るように、体制に害が及ばないように力を尽くしてきたと

というのが現実だと思います。

岡崎：それでは通訳も皆さんもお疲れだと思いますし、今日はもう時間が過ぎていきますので、用事がある方はお帰りになってもかまいません。とはいえ、別に血が通っていない日本人だけではなくて、血の通っている人はたくさんいるということで、こういう団体がありますということだけ、今、この震災対応でこういうことをやっていますということだけ、本当1人1分ぐらいでお願いします。

山崎やよい：皆さんこんにちは。私は「イブラ・ワ・ハイト」の山崎というのですけれども、今日はSSJの関係者として参りました。SSJは先ほどヤシーンさんにご紹介いただいた団体で、この震災、もちろん震災以前から北西部で活動しているのですけれども、今回は震災を受けて、すぐに緊急対応ということで募金活動を始めております。私たちのことに関してはまた後からSSJのホームページなどで見ていただけたらいいと思いますので、それは省略します。

今、私がここで伝えたいのは、私たちの活動は、例えば今結構お金が集まっています、クラウドファンディングですと1200万円程度集まっています結構な額なのですけれども、私はそれでもこの災害の大きさに比べたら取るに足りないものだと思います。しかし、象徴的な意味として、私はすごく意味があるものだと思います。というのは、私たちの活動というのは単に緊急対応としてやっているわけではなく、今サーレハさんがおっしゃったような、シリアの抑圧されていた権利を奪われていた人たちの尊厳を回復するための活動なわけです。ですから、そのための一つのメッセージとしての緊急対応だと思っていただければいいと思います。

ですからそれに言及してくださった、わざわざ私たちの名前をおっしゃってくださったサーレハさん、ありがとうございます。きっと私たちのこの一番奥からの望みという尊厳の回復をきっと共有というか、私たちが共有させていただいているということを知ってくださっているからこそ、名前を言及していただいたのだと思って、本当に感謝しております。

もう一つ「イブラ・ワ・ハイト」という活動もしております、今、トルコに逃れている女性たちを10年ほど支援しているのですけれども、今回ガズィアンテップとアンタキヤ、レイハナルという3カ所にいるのですけれども、彼女たちもご多分に漏れず被災しております。ですので、2週間前でしたか、イベントで結構ご支援を頂いたのですけれども、こちらもしろしければこんな刺繍を作っておりますので、こちらの販売も、またバザーなどもFacebookなどで広告いたしますので、そちらの方もぜひご覧ください。

質問者1(再度)：飛び入りで宣伝させていただければと思ったのですけれども、私の方もトルコ・シリアのクラウドファンディングの共同募金として活動していきまして、私はただの学生で、たまたまヨルダンで留学したことがあっただけなのですが、シリ

アやトルコに関わっている方々がたくさん集まって、自主的に始まった活動なのです。

寄付先の団体は三つありまして、一つがトルコの団体で、もう二つがシリアで活動されている団体ですが、全て日本の団体です。その中に先ほどプレゼンいただいた SSJ という団体もあるのですが、重複してしまったり、この講演の中でシリア、国連を通してとか、シリアの人がやっている団体に寄付するのが一番いいのではないかというお話もあったとは思いますが、日本国内でシリア難民に対してとか、トルコで活動されている団体はすごく少なく、そういう団体さん、日本の人々が興味を持ってもらえるようにという意味を持って、ちょっと違う道から支援を頂ける方、賛同いただける方がいらっしゃれば、ぜひご協力をお願いできればと思っております。ぜひよろしくお願いします。

小松由佳：皆さん、こんにちは。私はドキュメンタリーフォトグラファーとしてシリア難民の取材を 10 年ほど前から続けております。毎年 2 人の子どもを連れてトルコ南部を取材しています。私の夫はシリアのパルミラ出身で、夫もシリア難民でして、夫の家族も今度難民になって、今、トルコの南部に住んでいます。こういった夫の家族のネットワークから、シリア難民の取材を続けています。

こうした取材で訪れていたトルコの南部地域が今回地震で大きな被害を受けて、夫のいとこの家族が亡くなってしまったり、また親族や知人のほとんどが被災しています。現地からの話を聞くと、地震からかなり日がたちますが、まだまだ現地では厳しい状況が続いています。特に多くの人々は暖を取るためのまきや石炭、毛布、ベッドなどが足りず、寒さに苦しんでいるということを聞きました。また、シリア難民というのはやはりトルコでは多くが困窮世帯で、昨年初めからトルコが 2 倍の物価高になる中で、トルコ人の反シリア人感情が高まる中で、非常に生活が苦しくなってきました。こうした中で起こった今回の地震で、彼らの生活がますます追いやられていくのが非常に懸念されるところです。

現地での支援もどうしてもトルコ人が優先されて、シリア人に対しては食料や物資がなかなか届きにくかったり、またテントなどの配布、避難所などの利用もトルコ人に限られていたりという話も聞いています。また最近では埋葬をめぐる問題も現地で起きていて、トルコ人はイスラムのルールに則り、一人が一つの墓に埋葬可能なのですが、国境に近い町ではシリア人は集団埋葬が強要されていて、断るとシリアまで運んで埋葬しなければいけない。こうした問題も起きていると聞いています。

今回地震でまたトルコ南部、シリア北西部のことが報道で出てきていますが、この地震のニュースがだんだん報道されなくなっていても、シリアの人々がどうしているのか、彼らが何を思い、どのように生きているのか、こうしたことを伝えていきたいと思いますし、やはり関心を持ち続けることを、そうしたきっかけづくりをしていきたいと思っています。ありがとうございます。

山本：それではだいぶ時間を超過してしまいましたが、今日の会はこれで終了とした

いと思います。最後に、ヤシーンさんに改めて感謝の拍手で送り出したいと思います。
今日は本当にありがとうございました。

サーレハ：長い時間我慢してくださってありがとうございました。非常に良い機会を
頂いて、ありがとうございます。

(了)

講演録

「世界の縮図」としてのシリア問題

講演 ヤシーン・ハージュ・サーレハ

モデレーター 岡崎弘樹 司会 山本薫 通訳 森晋太郎

作成：ワタン研究プロジェクト

編集：岡崎 弘樹

編集補助：西道 奎

発行：2025 年 10 月 26 日

連絡先：プロジェクト・ワタン事務局

projectwatan3@gmail.com

<http://www.projectwatan.jp/>

©Hiroki OKAZAKI, Yassin al-Haj Saleh 2025